

心理学概論

～2017

科目コード

FA2501



単位数	履修方法	配当年次	担当教員
4	R or SR(講義)	1年以上	佐藤 俊人

※2017年度以前に入学した方が対象の科目です。2018年度以降に入学した方は履修登録できません。

※「心理学概論A」「心理学概論B」の2科目の内容を学ぶため、下記記載の「■講義内容」「■レポート課題」「■アドバイス」以外の項目は、p. 24「心理学概論A」(科目コード: FA2531、2単位、履修方法: RorSR)とp. 29「心理学概論B」(科目コード: FA2532、2単位、履修方法: RorSR)の2科目をあわせて参照してください。

※3日間13コマのスクーリングは2018年度が最終開講の予定です(2019年度以降は同一年度に2日間8コマのスクーリングを2回受講する必要があります)。

■スクーリング講義内容

回数	テーマ	内容
1	心理学とはどのような学問か	心理学とはどのような学問で、どういう方法で心を知ろうとしているのかを学ぶ。
2	心の構造①(精神分析的な視点から)	フロイトの人格論の概要について学ぶ。
3	心の構造②	フロイトの発達論の概要と、実際の乳幼児の発達の様相を比較検討。
4	日常生活の中の学習理論①	古典的条件づけの基本について学ぶ。
5	日常生活の中の学習理論②	古典的条件づけの応用可能性について学ぶ。
6	日常生活の中の学習理論③	オペラント条件づけの基本とその有用性、危険性を学ぶ。
7	発達について考える①	生まれてから就学前までの発達の様相と育児に関する考え方を学ぶ。
8	発達について考える②	児童期から青年期までの発達の様相とアイデンティティの確立について学ぶ。
9	欲求不満と防衛機制	精神分析的な視点から、自分の欲求不満と付き合うための方略を学ぶ。
10	カウンセリングの考え方①	来談者中心療法を中心にカウンセリングの基本的な考え方を学ぶ。
11	カウンセリングの考え方②	カウンセリングマインドと、日常への応用性について考える。
12	心理学的な情報を冷静に判断して考えるということ	心理学の諸理論の根拠とされてきた現象や事例について正しく理解し、自分なりの判断力を持つことを学ぶ
13	心理学的支援の考え方	心理学が実学であることを再認識し、これからの自分の活動にどのように応用できそうかを考える。
14	スクーリング試験	

■レポート課題

1 単位め	人間の初期（乳幼児期）の親子関係の特徴について、ほかの動物たちの親子関係との違いや愛着理論に絡めながら記述してください。
2 単位め	スキナーによる「道具的条件づけ（オペラント条件づけ）」とはどのようなものかを具体例を挙げながら概説するとともに、自分や周囲の人など身近な経験に照らし合わせながら、道具的条件づけによって他者の行動をコントロールすることの長所と短所を自分なりに考えなさい。
3 単位め	『客観式レポート集』記載の課題に解答してください。
4 単位め	『客観式レポート集』記載の課題に解答してください。

(2016年度以前履修登録者) 2017年4月よりレポート課題が変更になりました。『レポート課題集2016』記載の課題でも2018年9月までは提出できますが、できるだけ新しい課題で提出してください。ただし、『レポート課題集2016』記載の1単位めの課題に合格した方は、4単位めの課題は『レポート課題集2016』の課題で提出してください。

(2017年度以前履修登録者) 2018年4月よりレポート課題が変更になりました。『レポート課題集2017』記載の課題でも2019年9月までは提出できますが、できるだけ新しい課題で提出してください。ただし、『レポート課題集2017』記載の3単位めの論述式課題に合格した方は、1単位めの課題は『レポート課題集2017』の課題で提出してください。

1単位め
アドバイス

初期の親子関係の確立については、文化や各家庭でそれぞれ違って当たり前であり、「正しい親子関係」を論ずることはできません。しかし、例えば「刻印づけ」で有名なハイロガンと人間は明らかな違いがあり、ハーロウによるアカゲザルを使った代理母親実験も、代理母が、全く動かない布製と針金製の人形（サル形）であるという点ではそのまま人間に当てはめるわけにはいきません。人間は複雑な感情や性格を持っていますので、親子関係や親の養育態度によって子どもはさまざまに変容し得る存在です。

しかし、「必ずしも親が子どもに一方的に影響するわけではない」ことは忘れてはいけません。

テキスト（四訂版 p. 93 図 3-33、三訂版 p. 87 図 3-27、改訂版 p. 143 図 6-26）に示されるような関係は広く報告されていますが、あくまでも「関連がある」ということであり、養育態度と子どもの行動性格傾向のどちらが原因でどちらが結果か、については両方の可能性があるわけです。子どもを甘やかすとわがままになる、という表現の情報は私たちにすんなり入ってきますが、ひどくわがままな子を育てていると、甘やかせずにはやってられない、ということもよくある話です。このように、人間は親と子どもがお互いに影響し合いながら親子関係を発達させていきます。そのような人間の親子関係の特徴について、自身の経験や身近な例などと絡めながら自分なりに論述してください。

2単位め
アドバイス

人間は社会的な動物であり、常にお互いに影響し合っていますが、お互いの間に「ある側面でどちらかが優位」という関係になった場合、優位に立つ側が他者の行動をコントロールしようとし始めます。その最も簡単な方法の一つが「やって欲しい行動をしてくれた場合」

には賞を与え、「やってほしくない行動をした場合」は罰を与えるということで、おそらく人間が人間になった大昔から行われてきました。家庭の中でも悪いことや危ないことをした子どもを叱り（罰を与え）、良い行動をした子どもにご褒美をあげたりほめたりすることは、心理学を知らなくとも誰でもやっていることです。

つまり道具的条件づけ（四訂版 p. 108～114 三訂版 p. 100～105 改訂版 p. 14～16）という方法は、決して心理学者が発明したものではなく、誰もが日常的にやっている他者コントロールの方法です。

まず、その長所を考える場合は、なぜ私たちは「賞と罰」を自然にってしまうのか、を考えてみてもいいと思います。あるいはもしも「賞と罰」を使わずに他者の行動をコントロールするとしたら、どのような方法があるか、を考えてみるとおのずと長所（なぜ使いやすいのか、なぜついってしまうのか）が明らかになってくるかもしれません。

しかし、一方では自分が罰を与えられた経験を振り返ってみると、短所もあることも見えてくるはずで、スピード違反をしてお金を納付するのも「罰」ですし、言うことを聞かずに親に「ゴツン」とやられたのも罰です。その直後は反省したり、行動としては一瞬おとなしくなったりしたとは思いますが、それは「考え方や行動の様式が変わった」と言えるのでしょうか？おそらく 3 日もたてばもとの行動に戻っていたのではないかと思います。

このような視点も参考に、道具的条件づけの長所と短所を皆さんなりに考えてみてください。

3・4単位め
アドバイス

教科書をよく読み、別紙の客観式レポート課題に解答してください。「TFUオンデマンド」上で解答することも可能です。